巻頭インタビュー

心いっぱいの無償の愛で 少年たちの更生に人生を懸ける
～少年たちの笑顔が見たくて～

保護司・認定特定非営利活動法人ロージーベル理事長・作家・シンガーソングライター・DJ

大沼 えり子さん

宮城県出身。大学在学中から東京、仙台を中心にシンガーソングライター、DJとして活躍。2001年保護司の委嘱を受け、罪を犯した少年や成人の更生に尽力している。少年たちの更生を願い、少年院向けの音楽番組を制作し、送り続けている。

保護司として、少年（少年法などでは20歳に満たない男子・女子のことを指す）や成人の更生を助けるため奔走し、講演やDJ活動に飛び回る大沼えり子さん。2011年には、少年院を退院後の引き受け手のない少年を受け入れて更生と社会復帰を支援するための「少年の家ロージーハウス」を設立しました。保護司の役割や、やりがいについて伺いました。

―DJ、シンガーソングライター、子育てなど忙しい中、保護司を委嘱されました。保護司を引き受けたきっかけを教えてください。

息子が小学1年生のころ、家に遊びに来ていた友達の一人を、私の勘違いからとても傷つけてしまったことがありました。その少年は、私を責めることもせず、私に迷惑をかけたことを詫びました。私はその健気さに胸が張り裂けそうになりました。その少年は中学生になると学校も行かず、すさんだ姿を見せるようになりました。そんな彼の姿を見るたびに、あの時に私が正しい対応をしていればこうはならなかった、こうなってしまったのは私のせいだと胸がつぶれそうになり、何とかあの笑顔を取り戻したい、そう思っていたところに、保護司のお誘いがあり、一も二もなく引き受けようと思ったことがきっかけです。

―保護司の委嘱を受けて、17年目を迎えられますが、これまで数多くの少年を担当されていると伺いました。保護司のやりがいはどこにあると感じていますか。

保護司のやりがいは、対象の少年や家族が問題点を修復し、家族全員が幸せになっていく様子を見ること、その幸せの役に立てることと、その中で一緒に笑えることです。そして、辛かった日々を懐かしく話せるようになる様は、言葉では言い表せません。もちろん一筋縄ではいかないことの方が多いですが、困難であればあるほど、幸せな笑顔が溢れるようになった家族の姿を見た時の嬉しさは格別です。

―スマートフォンやインターネットの普及などの時代背景とともに少年犯罪の中身も変わってきています。それに伴い保護司として、少年や保護者に対する接し方も変化していますか。

少年非行自体が変わってきていることは事実ですね。以前のような悪ふざけが目立つ少年は少なくて、どちらかというと内向的で引きこもりの少年が多くなっています。以前は家庭崩壊や家庭内暴力など原因がハッキリしているケースが多かったのですが、近年は家庭の状況が多様化しているので、その対応もおのずと変わってきます。親子の意思疎通が取れていないため、その家庭の中に入っていかなければ前に進みません。家庭の中に入り信頼を得れば更生はスムーズになりますが、その分家族一人一人のメンタル面にも配慮が必要になってきています。

―保護司活動だけでなく、少年院向け音楽番組を制作されたり、引き受け手のない少年を受け入れたりと、幅広く少年の更生と健全育成にかかる活動を行っていらっしゃいますね。活動のお話を詳しく伺えますか。

保護司の委嘱を受け、少年院の見学に行った時に、殺風景な院内と、そこで矯正教育を受けている少年たちの澄んだ目、礼儀正しい姿勢が胸に突きささりました。虐待や家庭崩壊の中、何とか生き抜いてきた少年たちの現実を知り、胸が詰まる思いでした。

町はクリスマス商戦でにぎわいを見せている中で、彼らに幸せなクリスマスがあったのだろうか、と思うと居たたまれず、この子たちのクリスマスに何かをプレゼントしたい、お金では買えない心が温かくなる優しい贈り物がしたいと思いました。

その頃、私はラジオ番組でDJを担当していたので、好きな音楽やラジオ、テレビも制限されている彼らに、音楽とメッセージを届けることを思いつきました。少年院の協力を得て仲間と収録したテープを流すと「うれしかった」「必ず更生します」と100通以上の手紙をもらいました。それから17年、東北・北海道などの3つの少年院に毎月1時間の番組を送り続けています。

また、引き受け手がなく少年院を仮退院できずにいる少年たちがいることを知り、彼らが「ただいま」と帰る家を造ろうと心に決め、有志達と一緒に2008年法人を設立しました。その後、2011年、一軒家を借り上げ「ロージーハウス」の運営を始めました。

運営開始から今年で7年、これまでに46人の少年が入居し、温かな家庭を体験しつつ、自立し巣立っていきました。これからも「ロージーハウス」の灯は決して消すことなく、守り続けていかねばなりません。

―社会に居場所がないために再び犯罪を重ねてしまうという現実があります。少年の再犯率の割合は大人より高いと聞きますが、保護司に求められる役割はどのようなことだとお考えですか。

私がいつも心掛けているのは、愛を胸に、支え、見守り、導くことでしょうか。そのためには信頼関係の構築を図ること。それには許す心と全てを受け入れる大きな心が基本だと思っています。

非行少年たちは心に大きな傷を負っていますし、孤独を恐れています。その元凶が大人です。愛を受けることなく、裏切られ、虐げられ排除されてきた彼らの心に寄り添い、本人を全力で支えることです。

明るい大沼さんにつられ少年も笑顔を見せます。

何より、心いっぱいの無償の愛を注ぐことで、枯れそうな心に新たな命を吹き返す力を呼び起こすのだと信じて向き合っています。

誰かがいてくれる、ということが彼らの心の支えになっているのは事実で、その誰かが保護司なのだと思います。

―罪を犯した少年も、反省と償いを経て社会に帰ってきます。必死の思いで立ち直ろうとしている少年を、地域社会や周りにいる大人たちはどのように受け入れたらよいでしょうか。

地域としては、偏見の目で見ることなく大きな心で、温かく見守り、受け入れることが大切だと思います。そのためには、非行に走る少年たちの実態や保護司の存在を知っていただくこと、そして、共に支え合い地域全体で子どもたちを育てていく。これこそ非行や犯罪から子どもたちを守る大きな力になるのです。

社会としては、就労の場を提供していただくことが大切です。これまで置かれた環境から少年たちの就労は限られていますので、その門戸を開いてくれる企業や就労場所が必要不可欠なのです。

家族のみならず地域や社会が彼らを受け入れることこそ、犯罪や非行を生まない社会づくりに大きく寄与するものだと思います。

大沼えり子氏をモデルにした
映画「君の笑顔に会いたくて」上映中

保護司として、一人の人間として、少年たちやその家族、そして多くの人々との関わりを綴った大沼えり子氏著書「絲」を原作としています。
スローシネマ方式（※）で製作し、全国各地で上映中です。

お問い合わせ 埼玉県映画文化協会 TEL 048-822-7248

※スローシネマ
数年かけてゆっくりと各地のホールや公共施設で上映会を行い「地域コミュニティーの再生」を願おうとする上映運動です。

ケアハウスまきば園
行田市白川戸275
☎048-555-2202
笑顔が自慢のまきば園で、安心した生活を送りませんか？
ご夫婦での入居もお待ちしております！

高齢者総合ケア施設 **まきば園** ☎048-555-2202 行田市白川戸275
元気な挨拶と明るい笑顔! **鴻巣まきば園** ☎048-547-2202 鴻巣市前谷517-1
全室個室・ユニットケアの新型特養 **岩槻まきば園** ☎048-797-2202 さいたま市岩槻区橋根375
開放感ふれる緑やかなケア施設 **武里まきば園** ☎048-739-2202 春日部市武里中野705

福祉の街ネットワーク

株式会社 福祉の街 ☎048-645-2943 https://www.youism.co.jp
さいたま市大宮区桜木町1-12-5 沢田ビル4F